

袴田巖さんと再会する石川一雄さん

ふたりは死刑囚として東京拘置所(東拘)で約6年間一緒だった。



死地の身で共に暮らす束縛の再会 石川一雄

映画「袴田巖」プロジェクトを応援します

- 菅原文太 (俳優)
- 鎌田慧 (ルポライター)
- 小室等 (音楽家)
- 周防正行 (映画監督)
- 香山リカ (精神科医)
- 中山千夏 (作家)
- 辛淑玉 (のりこえねっと 共同代表 / TRAI 東京代表)
- 谷川賢作 (音楽家)
- 森達也 (作家 / 映画監督)
- 趙博 (ミュージシャン)
- やくみつる (漫画家)
- 南柱性 (絵本作家)
- 金子あい (俳優・アーティスト)
- 谷川俊太郎 (詩人)
- 松元ヒロ (コメディアン)
- 吉村喜彦 (作家)
- 太田昌国 (民族問題研究・編集者)
- 神田香織 (講師)
- 高坂勝 (『減速して生きる ダウンシフターズ』著者)
- 大橋秀行 (日本プロボクシング協会会長 / 元 WBA・WBC 世界ミニマム級チャンピオン)
- 八重樫東 (前 WBA 世界フライ級チャンピオン)
- 井上尚弥 (WBO 世界スーパーフライ級チャンピオン)
- 輪島功一 (元 WBA・WBC 世界スーパーウエルター級チャンピオン)
- 新田涉世 (日本プロボクシング協会 袴田巖支援委員会委員長)
- 石川一雄 / 早智子 (狭山事件冤罪被害者)
- 菅家利和 (足利事件冤罪被害者)
- 桜井昌司 (布川事件冤罪被害者)
- 杉山卓男 (布川事件冤罪被害者)

映画の概要

ドキュメンタリー / 100分
 撮影期間 2014年5月～2015年8月
 完成 2015年11月
 スタッフ 監督:金聖雄 / 撮影:池田俊巳 / 音楽:谷川賢作 / プロデューサー:陣内直行
 特別協力 映画「SAYAMA」製作委員会 / 翔の会 / 日本プロボクシング協会 袴田事件 弁護団 / 袴田巖さんを支援する清水・静岡市民の会 浜松・袴田巖さんを救う市民の会 / アムネスティ・インターナショナル日本
 製作 キムーンフィルム

キリトリ

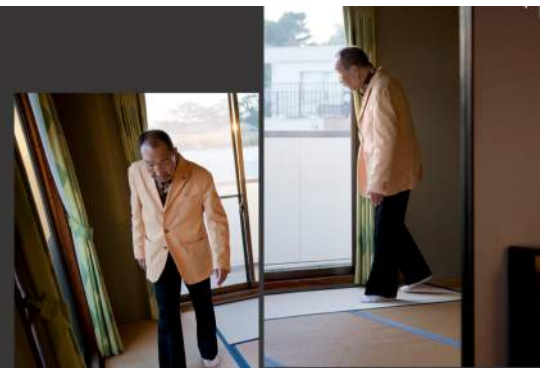
(ご注意)
 ・この用紙は、機械で処理しますので、金額を記入する際は、枠内にはっきりと記入してください。また、本票を汚したり、折り曲げたりしないでください。
 ・この用紙は、ゆうちょ銀行又は郵便局の払込機能付きATMでもご利用いただけます。
 ・この払込書をゆうちょ銀行又は郵便局の渉外員にお預けになるときは、引換えに預り証を必ずお受け取りください。
 ・この用紙による、払込料金は、ご依頼人様が負担することとなります。
 ・ご依頼人様からご提出いただきました払込書に記載されたおとこところ、おなまえ等は加入者様に通知されます。
 ・この受領証は、払込みの証拠となるものですから大切に保管してください。

収入印紙

3万円以上
貼付

印

この場所には、何も記載しないでください。



正直どんな映画になるのか、今は想像が付きません。

監督 金聖雄

しかし確かなことは、カメラ越しに観る袴田巖さんの存在そのものが強烈なメッセージを発信しているということ。そのメッセージを我々がどう受け止めるかが問われるような、そんな映画になる気がします。

2014年3月27日。

映画「SAYAMA」みえない手錠をはずすまで」完成後、久しぶりに石川一雄さんそして早智子さんの撮影にでかけました。狭山事件から51年、今も尚、必死のアピールを続ける石川さん。「無罪を勝ち取るまで撮影を続ける！」そんな思いでカメラを回していた次の瞬間に「一報が入りました。「袴田事件再審決定」」どつどつあがる東京高裁前。石川さんの笑顔そして早智子さんと支援者たちは手を取り合っていました。「拘留を続けることは耐え難いほど正義に反する」「重要な証拠が捜査機関によってねつ造された疑いがある」、そして即日釈放。

48年ぶりに解放された袴田巖さんの姿はその日のニュース映像で劇的にまた生々しく映し出されました。元気な姿と拘禁された理解の難しい言葉。解放された喜びと同時に48年という想像も及ばない奪われた時間と考えずにはいられません。数日後、石川一雄さんと一緒に後楽園を訪ね、ずっと巖さんを支えつづけた姉の秀子さんとお会いしました。81歳の秀子さんの肌はつやつやしてその笑顔は眩しいほどに感じられました。困難を乗り越えた人だけが放つ輝きです。「2人を撮りたい！」後先考えずに「映画袴田巖プロジェクト」が動き始めました。撮影はすでにはじまっています。後楽園で名誉チャンピオンヘルトを巻きガッツポーズを見せる巖さん。事件のあった静岡を訪れ、友人たちと再会する様子。はじめて、家に戻り支援者たちに歓迎をうける巖さん。そして騒ぎ立てる周囲とは裏腹に巖さんの、新しい日常。は静かで淡々としています。家の中をひたすら歩き食べて寝る。折りのようなつぶやき、神の世界の話。そして「甘いものが食べたい」という普通の会話。

正直どんな映画になるのか、今は想像もつきません。しかし確かなことはカメラ越しに観る袴田巖さんの存在そのものが強烈なメッセージを発信しているということ。特別なことを直接的に語らなくても、そのメッセージを我々がどう受け止めるかが問われるような、そんな映画になる気がします。私たちにできることは映画をつくり袴田事件そして巖さんのメッセージを多くの人に伝えることだと考えます。



キリトリ